

2026年度 情報学部 小論文試験および数学試験についての全体講評

1-1. 小論文試験の出題意図

情報学部の小論文試験は、アドミッション・ポリシーにおける「数学や情報学の基礎的・基本的な知識・技能」、「幅広い知識・技能を活用できる思考力・判断力」、ならびに「自らの試行や判断を他者に伝える表現力」について評価することを主たる目的とした設問から構成されています。このため、社会で利活用されている情報技術に関する文章やデータなどを題材とした問題を出題し、題材の内容を理解するための知識や理解力に加えて、理解した内容に基づいて考察する思考力と、設問に沿って論理的にかつ過不足なく思考した内容を記述する表現力を問う出題になっています。

1-2. 採点・評価のポイント

いずれの選抜区分でも、小論文の出題はそれぞれの題材に基づいた2つの大問（問題1と問題2）から構成されています。問題ごとの評価のポイントは以下の通りです。

問題1

問題1では、主に題材の内容に関する知識や理解力・思考力が問われ、理解したことを過不足なく表現することが期待される2問から構成されています。

問1では題材の文章が述べている内容や、技術と社会との関わりなどを的確に把握する理解力が問われました。また、問2では主に理解に基づいて思考する力が問われました。解答の論述においては、設問の前提となる題材に基づくことが重視されています。題材に関する知識あるいは理解に基づく思考の内容を適切な文章として表現することが必要でした。とくに、設問に対応する箇所を適切に抽出できる理解力と論点を明確にして思考する力が重視され、問われていることがらについて、適切に理解しているか、提示された問いについて考察を行っているか、その内容を指定の文字数の範囲で簡潔に記述できているかが評価のポイントでした。

問題2

問題2においては、問われたことについて自分自身の考えを記述することが求められています。その記述の明快さと論理展開の適切さが評価のポイントです。題材として提示された記事の内容を理解し、その理解に基づいて設問に沿って考察する思考力、および考察した内容を適切に述べる表現力が求められています。一部の選抜区分に、図（グラフ）を読みとって計算を行い解答する設問がありました。そこでも、題材として提示されたデータが示している状況を理解する能力と、さらに正解を導くための思考力を身に付けていることが求められました。

問題2においては、計算を必要とする箇所を除いて、唯一の明らかな正解は存在しません。しかし、題材に含まれない内容や、題材において否定されている事実に立脚した論述は適切ではありません。また、設問で指定されていることから逸脱した論理の展開や事例の提示なども、適切な解答ではありません。問いの前提となる仮定や事実を把握すること、そしてそこから自分自身で考えて結論を導くことが重要です。評価においては、導かれた結論の良し悪しではなく、なぜそのように考察したのかについて、題材と設問に立脚しつつ簡潔かつ明快に述べているかを重視し、現実的な観点からの考察であるかなどの要素も踏まえた評価がなされました。

2-1. 数学試験の出題意図

情報学部の数学試験は、アドミッション・ポリシーにおける「数学や情報学の基礎的・基本的な知識・技能」、「幅広い知識・技能を活用できる思考力・判断力」、ならびに「自らの試行や判断を他者に伝える表現力」について評価することを主たる目的とした設問から構成されています。4つの大問からなり、全て教科書の章末問題レベルの難易度です。基礎的な計算力を確認するとともに、題意を理解し筋道をたてて解答する力を問う問題を出題しています。全ての問題を記述式の解答形式にしており、数学の知識・技能および思考力・判断力に加えて、解答を導くアプローチを記述する表現力も評価しています。

2-2. 採点・評価のポイント

数学の出題は、4つの大問（問題1～4）から構成されています。問題ごとの評価のポイントは以下の通りです。

問題1

5つの小問（(1)～(5)）からなります。(1)は三角関数の性質や定理を使うことができるかどうかを問うています。(2)は平均値と分散の定義を知っているかを確認し、そこから計算式を立てて問われている値を求めることができるかを見ています。(3)は部分分数分解の確認であり、特に分母に2次以上の因子が含まれているときの分解ができるかを問うています。(4)と(5)は微分・積分の計算力を問うています。合成関数の微分と部分積分の計算ができるかどうかを確認しています。

問題2

有理関数（分数関数）のグラフを作成する問題です。3つの小問（(1)～(3)）からなり、小問は関数のグラフを描くために必要な手順が順に並んでいます。(1)では、関数の極限を調べることができるかを問うており、(2)は有理関数の微分をすることで極値を調べることができるかを問うています。(3)でグラフの概形を描きますが、特に不連続点が2つあること、極値の符号、負または正の無限大への極限が0に向かうことが重要でした。

問題3

複素数平面上を動く点がどのような軌跡を描くかを問う問題です。2つの小問(1)と(2)からなり、(1)はよく知られる垂直二等分線上を動く点の方程式です。(2)は複素数の絶対値の計算とそれを含む方程式を上手く変形することができるかを確認しています。

問題4

三角関数を用いた方程式について、解をすべて求める問題です。3つの小問（(1)～(3)）からなり、最後の小問(3)は題意を正確に読み取る力が試されます。(1)は定められた変数の範囲の中で方程式の解を列挙することができるかを問うています。(2)はいわゆる三角関数の和積の公式を用いることで、方程式を書き換える必要があります。(3)は問題の設定をよく理解した上で、命題が指す値が何であるかを把握しなければなりません。問題を考えるための方程式とその解法は(2)と同じであり、あとは丁寧に論証できるかどうかを試しています。